

森林教室の継続性に関する一考察

飛騨森林管理署 甲森林事務所
森林官 大塚 沙織

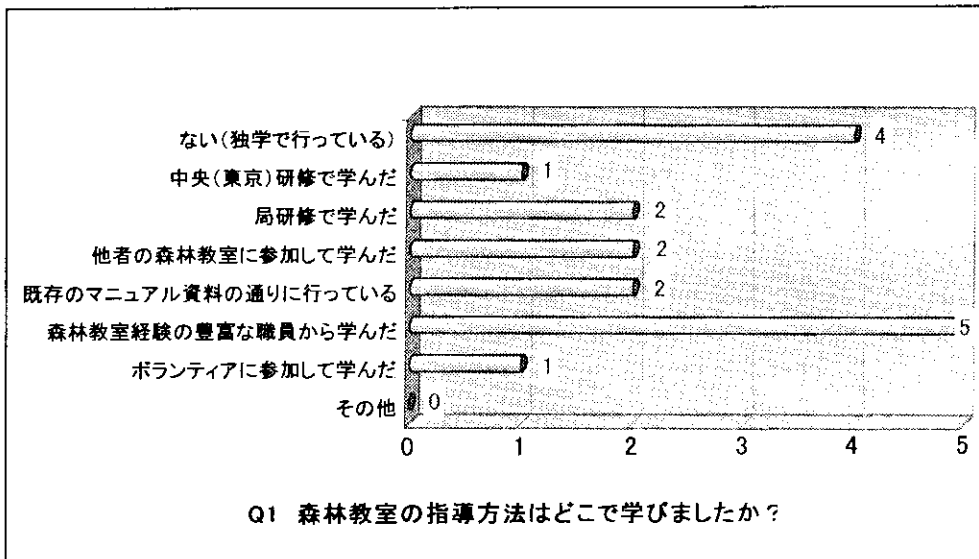
1. はじめに

環境教育の一環として森林教育への注目が集まる中、小学校からの総合学習の時間をういた森林教室実施要請は年々増加傾向にあります。当署でもこのような要請に応え、今年度17回の森林教室を実施しました。しかしながら、要員不足や業務過密の中で行われる署単位での森林教室は、数々の問題を抱え続けていることも事実です。今後さらなる要請の高まりが予測される森林教室に対し、業務として継続的に実施するためにはどうしたらよいか、また人事異動によって分断されないためには何をすべきかを検討しましたので報告します。

2. 取り組み経過

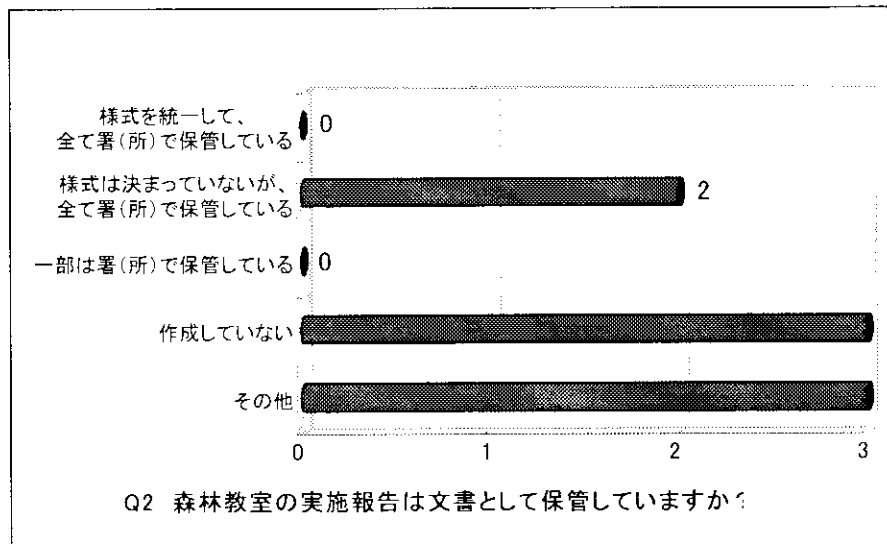
第一に、署内で森林教室反省会を実施し、森林教室が抱えるあらゆる問題の存在を明らかにしました。さらにその他の問題の洗出しと検討を行うために、名古屋分局管内全ての署(所)の森林教室担当者へアンケート調査を行いました。これにより各署(所)の森林教室の実態について、次のような結果を得ることができました。

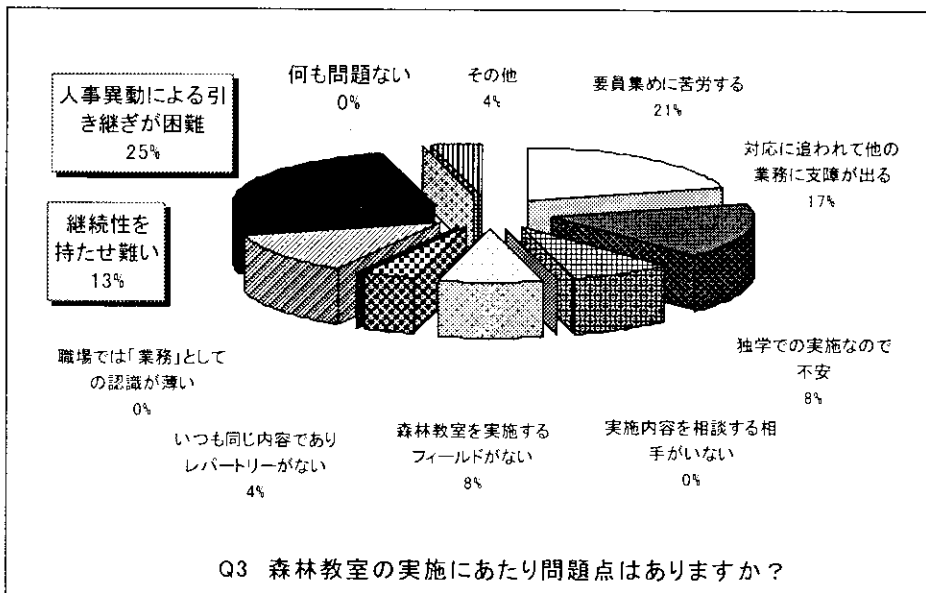
※回答は全て複数回答可とし、7署(所)全ての回答が有効回答となっています。



Q1 から、森林教室経験の豊富な職員から学ぶ、もしくは独学で実施している現状が窺えます。研修は新たな知識やデータを得る場所としており、署(所)で森林教室を実施する段階では、経験のある身近な職員に頼るところが大きいです。

Q2からは、統一様式での報告書保管がこれまでになされていないことが明らかになりました。「様式は決まっていない」と、「その他」の回答には、実施要領や資料、写真だけは保管しているとする回答が多くを占めています。作成していない署(所)も3つあり、森林教室業務が消化型になりつつあることが窺えました。





Q3 で特に注目すべき点は、「何も問題ない」と回答した署(所)が一つもなかったことです。多くの問題の中でも「人事異動による引き継ぎが困難」であると考えている署が最も多いことから、これまで森林教室を通じて築いてきた地域とのつながりをどう継続させていけばいいのか、担当者は不安を抱えていることが分かりました。

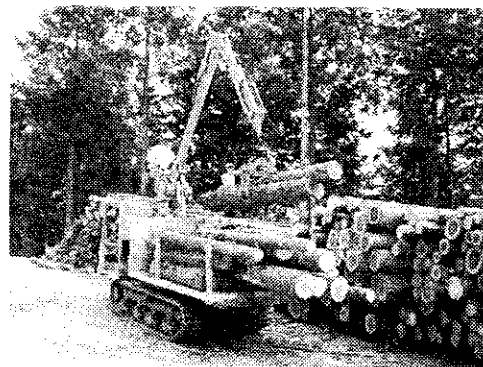
3. 検討結果

これらの問題意識を踏まえ、署内での森林教室担当者会議を実施しました。人事異動に伴う森林教室の継続性断を改善するために、森林教室を業務として確立し、継続性を持たせるための手段を検討しました。検討結果は次の4つです。

- (1) 屋内の森林教室の画像共有化
- (2) 屋外の森林教室のゲームマニュアル化
- (3) 森林教室実施報告書の作成・保存
- (4) 局・署(所)間のネットワーク構築

(1) 屋内の森林教室の画像共有化

屋内の森林教室は、あらゆる学校から同様の要請が来るが多いため、その内容については情報の共有化が可能であると考えました。パワーポイントを用いた森林教室は、CD 一枚の手軽さだけでなく、雨天時の急な対応も可能になり大変便利です。そこで、各署(所)が行う自由な森林教室を阻害することなく、素材のみを共有することを検討したものが、画像CDの作成です。森林教室に有効な多くの画像を一枚のCDに集め、ここから必要な画像を選択したり、好きに組み合わせたりすることで、対象年齢や講義内容に合わせたプログラムづくりができるようにしました。(①、②は画像CDの一部です)



① 林業や木材利用の話に活用

(2) 屋外の森林教室のゲームマニュアル化

自然観察や散策、フィールドが定まっている条件下については、環境条件の違いで制約が多いため情報の共有化は図りがたいといえます。したがってフィールドが定まっておらず、常に森林教室の現場が変わる場合に限定して情報共有を図る手段を検討しました。アイテムとして必要なのは、多種多様なゲームのマニュアルです。

ゲームごとにカード化して、対象年齢別・フィールド別に分類しておくことで、それぞれの現地に合わせて、適するゲームを選択できる形にしました。屋内・屋外いずれの場合も共有するものはアイテムだけとし、森林教室を実施する者の自由な発想でプログラムを組み立てられるよう、自由選択性を重視しました。



② 土砂崩れなど災害の話に活用

(3) 森林教室実施報告書の作成・保存

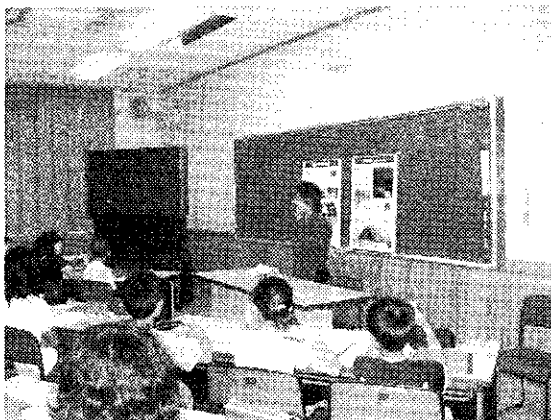
森林教室実施報告書		飛騨森林管理署 No.
責任者 甲森林官 大塚少輔	実施日時 2003年 6月 17日(火) 天候(曇り) 10時 40分 ~ 12時 15分	
実施場所 (室内・野外) 朝日小学校視聴覚室及び外庭	対象者 [所属] 朝日小学校 代表者氏名 福田教諭 大人 _____ 名 大学(年生) _____ 名 高校(年生) _____ 名 中学(年生) _____ 名 小学(5年生) _____ 19 名 未就学 _____ 名 計 _____ 19 名	
実施種目 パネルとビデオで森林のはたらきを学習 実験装置での「森林の国土保全・水質浄化機能」の学習 樹木標本及び特徴的のり木(ミズメ・キブシ・ホオノキ等)に実際に触れて遊ぶ 聴覚器を樹木にあててみよう	協力者の人数 久々野森林官 1 名	
準備したもの・使用物品 テレビ・ビデオ・パネル(森林のはたらき&緑のダム)・配布プリント2種類・実験装置2台・バケツ・ジョウロ・ピーカー・聴覚器・樹木標本多数・実際の木の枝多数・剪定/サミ5本		
当日のプログラムの流れ 視聴覚室でビデオ鑑賞→パネルや黒板、配布プリントを使って森林学習→理科室へ移動し、保水能力実験・標本を見たり実際の枝実際に触ったりして遊ぶ、名前を知る→外庭の木に聴覚器をあてて、何の音が想像する		
プログラム全体で感じた点・良かった点 配布プリントの作成に時間がかかった。山で多種多様な木の枝を採取してくることも、久々野森林官とともに時間を費やした。しかし実際に触って遊ぶことで、子供たちもより楽しんでくれたので準備したかいがあった。当日はマスコミ関係者が3名ほど来ており、講演の合間に質問があつてその対応には少々戸惑った。		
事故・ヒヤリハット 剪定/サミは鋭いので、子供の手に使わせる口は少しヒヤヒヤした。何事も無く無事に終わった。		
今後に向けた反省点 小人数にはパネルの使用は向いているが、これ以上対象者が多い場合はパネルは字が小さく不向きである。聴覚器の遊びでは、実際に何の音であるかを判別してないので、想像させる口止めたほうがいい。用意したことが多すぎて終了時間ギリギリになった。もう少し深問に余裕のあるプログラム作りをすべき。		

森林教室が消化型の業務になりつつある現状を踏まえ、業務として継続させるためにはまず文書化したものを保存することが先決です。実施した森林教室毎に統一様式の報告書を作成することで、引き継ぎでの連絡事項がスムーズになります。一件一件を取りまとめる業務自体が担当者の負担とならないように、余計な項目を省き、必要最低限の次回に生かせるデータのみを記載する形にしました。

③は、飛騨署で実施した森林教室を報告書に実際にまとめたものです。例えば「実施種目」及び「対象者の人数」に対する「協力者の人数」は、どの程度の活動にどれだけの人数が必要となるかが把握できます。また、次回の森林教室での事故を未然に防止できるよう、「ヒヤリハット」の記載項目を付加しました。「今後に向けた反省点」は、次の担当者が類似した内容の森林教室を実施する場合に、注意すべき点をアドバイスしてもらいたいと考えています。

飛騨署では今年度の森林教室を全てこの様式にまとめ、使用した資料や森林教室の様子を撮影した写真(④、⑤参照)等とともに保管していく作業を行っています。

③森林教室実施報告書の記載例



④保管している写真1

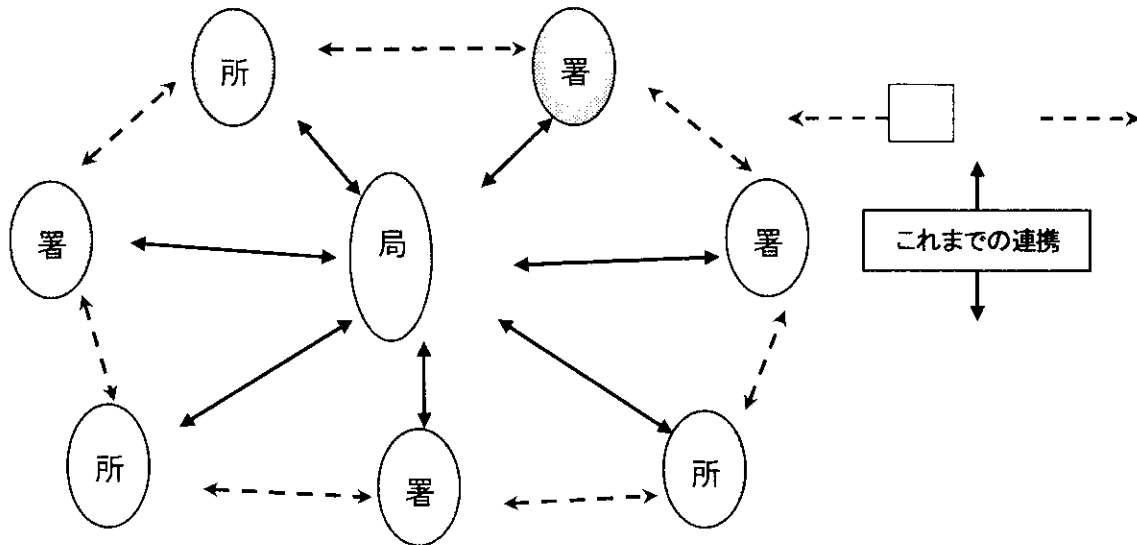


⑤保管している写真2

(4)局・署(所)間のネットワーク構築

(1)～(3)までのマニュアルや報告書を最大限に活用するためにも、一署(所)完結型にするのではなくネットワークをつくる必要があります。これまでのように署(所)内だけの相談や打合せに留まっている壁を崩し、必要なとき必要な情報をやり取りする「横のつながり」を持つことで、円滑な情報共有が可能となります。局と署(所)との情報交換や連携は今までどおり保持した上で、署(所)の森林教室担当者間での連絡体制を整えることは、森林教室の経験者や熟練者を育てる環境づくりの一步であると考えています。(⑥を参照)

署(所)間の距離が長い現状を踏まえると、電話やインターネットを活用した連絡体制が最も効率的です。(1)で示した CD の画像のように、インターネットの使用でやり取りできる情報は多分にあります。またメールを効率的に使うことで、時には情報を求め、時には困った問題を相談でき、そして反対に自分の経験を他署(所)の森林教室に生かすこともできます。



⑥ネットワーク体制

4. 今後の課題

これから益々要請の増加が見込まれる森林教室に対し、私たちは国有林野事業を担う立場として柔軟な対応が迫られます。森林教室業務の負担を少しでも軽減させ、また継続的に行うことができるように今回はマニュアル化を試みました。しかし、これらソフト面だけが進んでもハード面の準備が間に合わなければ意味をなしません。課題として残っているのは次の4つです。

- (1)マルチプロジェクターを各署(所)で所有する
- (2)パワーポイントの使用方法を学ぶ場(研修等)を設ける
- (3)ネットワーク確立のため、担当者にメールアドレスを与える
- (4)情報交換のため、担当者間の連絡体制をつくる

(1)は、屋内での森林教室を CD 一枚でどこでも実行できるようにするための必須条件です。それと同時に、担当者はパワーポイントのある程度のレベルで使いこなせなければなりません。この2点がクリアできれば、少なくとも屋内の森林教室の計画・実行は以前よりもずっと容易になります。

(3)と(4)は、署(所)と署(所)の間での連絡をとりやすくするための課題です。森林教室という特殊な業務を、共に実行している担当者同士こそ、情報交換も相談も積極的にやり取りできる「壁の無い関係」がつけられることが望ましいです。

飛騨署では、これまでに築いてきた地域との触れ合いやつながりを途切れさせることのないよう、継続できる森林教室づくりに、より一層力を入れて取り組んでいきたいと考えています。